

2020年9月13日

## ゆるし合う心

年間第24主日の聖書のテーマは「怒りとゆるし」です。わたしたちの日常生活において大変身近で、もっとも手強<てごわ>い感情について、少しだけ黙想いたしましょう。

聖書にふれる前に、以前の主日の説教でもふれましたが、ローマで語学学校に通っていた時のエピソードにふれたいと思います。ペルージャ外国人大学の学生たちの多くは、現役の外語大の学生や若い人たちが中心でした。しかしローマの語学学校では若い人もいましたが、その大部分は年配のおとなであり、学生の顔ぶれが異なっていました。ある時、語学学校の先生はレッスンの中で次のような質問をおとなの学生たちに投げかけました。「日常生活の中で、もっとも危険で避けた方が望ましいことはな—に？」このような曖昧<あいまい>な質問をイタリア語で答えることは正直、容易なことではありません。ところがそのクラスに参加していたメキシコ人の中年の女性は次のように答えました。

「それは“怒り”ね。」

「どうして？」

「それはね。自分をコントロールできなくなることよ。

もっとも避けた方がいいことなの。とってもこわいわ。」

そのご婦人は普段、朗らかで優しい雰囲気的女性でしたが、その時の真剣で鋭いまなざしは印象的で、今でも時折、思い出します。

今日の第一朗読・シラ書の冒頭には「憤りと怒り、これはひどく忌<い>まわしい。罪人にはこの両方が付きまとう」（シラ27・30）と人間が抱く感情の中でも対処の困難な憤りと怒りについて説明しています。シラ書は「弱い人間にすぎない者が、憤りを抱き続けるならば、いったいだれが彼の罪を赦すことができようか。自分の最期に心を致<いた>し、敵意を捨てよ」（シラ28・5-6）と怒りの感情を捨てることを求めています。

わたしたちの日常生活では、残念ながら不満や憤りの感情を抱いてしまう場面が度々起こります。それも愛する人々の間で、家族、両親、子ども、兄弟姉妹、友人といった大切な人間関係において、強い感情を抱いてしまうこともあるかもし

れません。わたしたちはどのように怒りに代表される強い感情と向き合うことができるのでしょうか。度々、耳にすることばは、たとえば「感情はどんなものでも吐き出した方がよい」というような意見ですが、怒りにかんしていえば、必ずしもよい解決方法とは思えません。ドイツのエーリッヒ・フロムは、「**欲求不満をがまんしなければ重要なことは何も達成できない**という、人生の根本的な事実を考えればよい」とわたしたちに立ち止まって考えることを促します（出典：エーリッヒ・フロム（1975）『破壊—人間性の解剖』紀伊國屋書店）。

さらにイエスさまの弟子たちへの勧めは明快です。「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。…あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう」（マタ18・22、35）と、互いにゆるし合って生きるよう励まします。わたしたちはだれもが弱い人間で、隣人を傷つけたり、悲しませたり、失敗を犯します。しかし天の父は、わたしたちが怒りや憤りの心で生きるのではなく、平和な心で生きることを望んでおられます。「天が地より高いように、いつくしみは神をおそれる人の上にある」（詩編103）。

心の鍛錬、柔軟体操として——ゆるし合う心——を願い求めたいと思います。  
神と大切な隣人との結びつきを強める一週間でありますように。

カトリック立川教会 主任司祭  
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第24主日聖書朗読箇所：

- ① シラ27・30、28・1－7  
—答唱詩編—詩編103より
- ② ロマ書14・7－9
- ③ マタイ18・21－35